

## 会話の「割り込み」に見る男女のインターアクションの違い

藤井桂子

[キーワード]

割り込み、男女差、インターアクションスタイル、独立と協調、妨害と支援

### 1 はじめに

会話における「割り込み(interruption)」とは、会話分析の先駆的な研究であるSacks 他(1974)が、会話の原則として説明する「一人ずつ話す」というシステムに反して、相手の発話の途中で他の参加者が、発話(単に聞いていることを示す短いあいづちを除く)を開始する現象である(注1)。

この現象は、話す権利の侵害として解釈され、男女の社会的な力関係を反映する現象として論じられることも多い。しかし、こうした研究の多くは、現象の数だけを単純に数え、割り込みが会話の中で果たす機能をほとんど区別していない。その結果、男性から女性に対する割り込みがその反対の場合よりも多いという報告(Zimmerman & West 1975, 山崎他 1984 他)がある一方、女性から男性への割り込みが多い、あるいは意味のある差異はないという調査結果も多数見られる(James & Clarke, 1993)。割り込みにどんな機能を担わせる傾向があるのかは、インターアクションのスタイルによっても異なってくる問題であり、研究結果のばらつきから見ても、男女において異なる意味で割り込みが行われていることが考えられる。そこで、本稿では、割り込みをインターアクションスタイルを見る分析対象のひとつと考え、日本人の男性同士、女性同士の会話に生ずる割り込みの比較から、日本人男女のインターアクションの傾向と違いを考察していく。

### 2 調査資料

日本語母語話者である女性友人同士の会話7組(25名)、男性友人同士の会話7組(22名)を分析の対象とした。1組の会話は3人~4人の参加者で構成されている。これらは、1993.12~1996.9の期間に、東京と東京近郊において

収集した。収集の仕方は2通りあり、一つは友人同士が雑談中に許可を得て録音を行った。もう一つは、会話の調査のため録音する旨を伝え友人同士に集まってもらい、自由に話してもらったものを録音、可能な場合は録画した。参加者の職業等は大学生、大学院生、教員、会社員、主婦、自由業他で、年代は20代前半から50歳前後までである。各組の録音時間は20～30分程度で、このうち、ある話題が会話の参加者に取り上げられ、その話題が終了するまでのひとまとまりをそれぞれ分析対象として文字に起こした。分析の対象とした部分の総時間数は約87分。分析対象の「割り込み」総数は426例である。

### 3 割り込みの分類

まず、割り込みを次の3つに区別した。

調和系：相手の発話権を脅かさず、トピックが全面的に保持されている場合

調整系：相手の発話権を脅かさないが、トピックが全面的には保持されていない場合

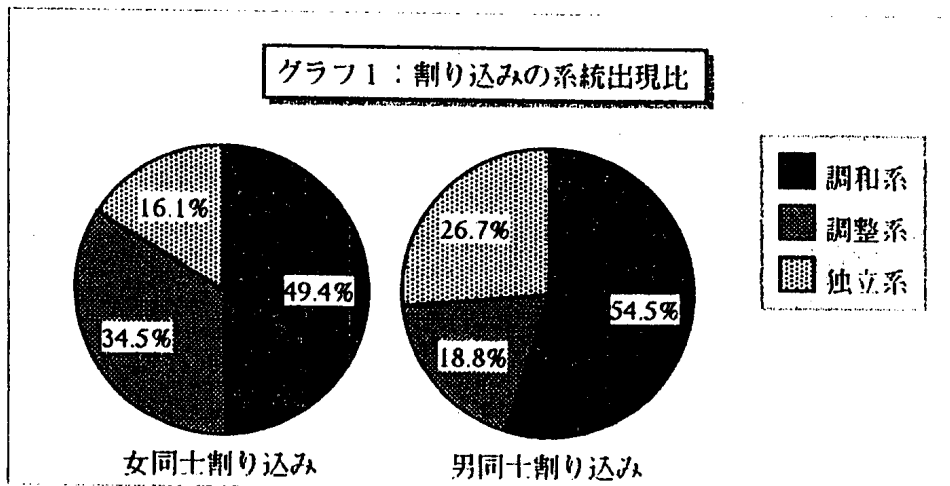
独立系：相手の発話権が維持されない場合

ここでいう発話権とは、話し手としての地位を確保していることを示す。したがって、相手の発話権を脅かさないということは、聞き手の立場で発話を行っていると考えられる割り込みを示す(注2)。また、トピックとは、相手発話の内容(命題)を意味し、トピックの全面的な保持は、命題に沿う内容の発話が行なわれていることを示し、また全面的には保持されない場合というのは、トピックの焦点が移動するなど、部分的な変更が見られるような場合である。

### 4 調査結果の分析と考察

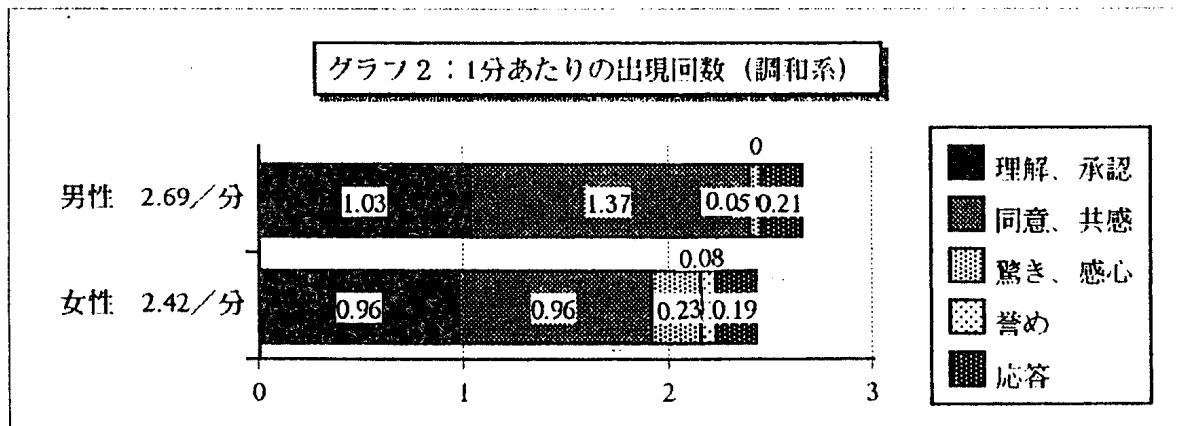
まず始めに割り込みの頻度全体を比較した結果、女性は平均で1分間に4.90回、男性は4.94回の出現で、ほとんど差がみられなかった。つぎに、3つに区別した重なりのある出現を見ると、グラフ1に示すように、女性では調和系49.4%調整系34.5%独立系16.1%の割合で生じ、男性では調和系54.5%調整系18.8%

独立系26.7%の割合で生じていた。以下では、こうした全体的な傾向を含めて、それぞれの系統に生ずる割り込みについて男女のインターアクションに特徴的な点を分析していく。



#### 4-1 調和系

まず、明らかなのは、男女とも「調和系」の割り込みの割合が約半数を示め、最も高い点である（グラフ1）。調和系では、「同意・共感」「理解・承認」「驚き・感心」「誉め」「応答」といった発話が見られる。これらの発話は、Brown&Levinson (1987)がpositive politenessと呼ぶ概念とも一致するもので、他人にとっても望ましくありたいという話し手の自己イメージ（positiveな面子）を積極的に支援するものである。こうした割り込みは女性の会話に特徴的であるという指摘（Coates 1996他）もあるが、日本人の会話においては、これらは必ずしも女性に特有のものではなく、男性の会話においても多く見られ、しかも割り込みの中では最も中心的なものであると考えることができよう。しかし、調和系をさらに細かくみると、男女の違いがいくつか指摘できる。グラフ2は、調和系の割り込みをさらに分類し、1分間あたりの出現回数を示したものである。まず、女性の会話では、「驚きや感心」などの「感情的表現」を示す割り込みが0.23回（調和系の9.5%）見られるのに対し、男性では0.05回（調和系の1.9%）と少ない点があげられる。女性の方が約4倍多い。



次の例は、女性の会話に生じた「驚きや感心」などの割り込みである。

例1 テストで運がよかった話 (FG1)

A: あの時結構ラッキーだったというかね 何か隣の隣の隣のね あのゼミ代が  
いて [ あ の だ から だ からもう隣の3人?みんな写してもらってんの  
→C: [あっそう えっいいな-

このほか「すごい」「うそー」「えっー」「うわ すごくいいはなし・・・」  
「どうしよう」などの発話の割り込みが見られた。一般的に、女性の方が感情  
表現を積極的に用いると信じられている傾向があると思われるが、これと一致  
する結果であった。これに対し、男性の会話では、驚きや感心が示され得るよ  
うな相手のエピソードに対して、こうした反応は少なく、ある場合においては  
むしろ冷静、客観的にコメントを述べるような形の反応がなされる傾向が見ら  
れた(例2)。こうした傾向は割り込みの箇所に限らず、見られた(例3)。

例2 レポートの課題が間違っって伝達されてきたことについて (MG1)

A: ...おれんとか回ってきたら、「既成緩和の経済的根拠  
[とその失敗]でさ[-@@  
B: [あ-  
→C: [超やばくない?そ [れ  
A: [ おれ丸々やり直した

例3 バッテリーが上がり、川辺に駐車した車が増水時に動かなかった話 (MG4)

S: . . . 俺の車が一番最初にあったから俺が動かないとみんな動けなかった

→K: @@なんて人騒がせな、 迷惑 迷惑千万ってやつだよ

N: @@

S: =ぼろくそ言われたよ . . .

また、「誉め」の割り込みは、女性の会話では4回生じていたが、男性では、収集したデータの範囲では、見られなかった。誉めについて、Holmes(1995:122)は、ニュージーランドの白人を対象とした彼女の調査を含め、アメリカ(Wolfson 1983, Herbert 1990)、ポーランド(Lewandowdka-Tomszarczyk, 1989)における調査で、女性は男性に比べ、より多くの誉めを与え、また受け取ることが報告されていると述べている。また、男性は「誉め」を相手との地位関係と結び付けて考える傾向があることが指摘されており、会話の中での優位性への志向が誉めの使用に影響していることが示唆される。日本人の会話の割り込みにも、女性がより積極的に誉めを行うという傾向や、男性の誉めのとらえ方の傾向が反映されている可能性があるといえよう。

調和系の中で高い割合を占めているのが、「理解・承認」と「同意・共感」を示す発話の重なりだが、同意・共感については、男性の方が多く生じている。同意・共感の割り込みは、会話の中に散在しているが、意見の一致が見られる場合はその部分に多く生ずる。男性の場合、意見がはっきり一致した部分で、やり取りが女性より長く続き、同意割り込みの数を増やしている傾向があるようだ。やり取りが女性より長く続くのは、各々の参加者が同じ意見で一体となりながらも、各自が独自に意見を述べようとする傾向が強いからではないかと考えられる。次のような例が見られた。

例4 英語教育 について (MG3)

B : ただまあ コミュニケーションっていうのは大切なんだけども どうしてもね  
日本人の子供っていうのは学校で、しか機会 [がないからね

→D : うん [そう

→C : [そうですね

→A : [そうそうそう

B : なんぼあれしても機会が少ないから [ 機会がもっと多けりゃね

D : [教室で

D : 教室一步でたらもう、[英語つかわなくなつていいから [ 必要ないからね

→A : [もうそうそう [そう そうね

D : ××それ言われると我々こう英語教育に携わってる人にとってはちょっとね

C : @@@

B : うん

A : そうですね

D : 教室だけが勝負みたいな 感じになるからね

B : うーん うーん だから逆に教室だけの勝負  
だったらまたそれこそ それだけで考えなきゃねー ほんとはコミュニケーション  
重視でいくべきか [ それとも教室でしか もう授業の 英語に

→A : [うんそうですそうです  
接する時間がないんだということだったらそこ  
でこうメリット [を出せるような [分野をね [一

→A : [そうですね ある程度 [効率 [ええ考えなくちゃ

→C : [そうですね うーん

B : コミュニケーションとは [いかなくてもね

→A : [そうですそうです 不十分に  
なちゃったり [するんですよ

→B : [ねーどっちつかずになっちゃたりするだろうから

A : はい はい

Edelsky(1981) は、floor (発話権) をシングルタイプと 共同タイプの2つに区別している。一人の参加者による単独のfloorと2人以上の参加者によって共同で形成されるfloorである。Edelskyは、共同タイプにおいて女性は発言の量や頻度が増えるのに対し、男性はシングルタイプで発言の量や頻度が増すと

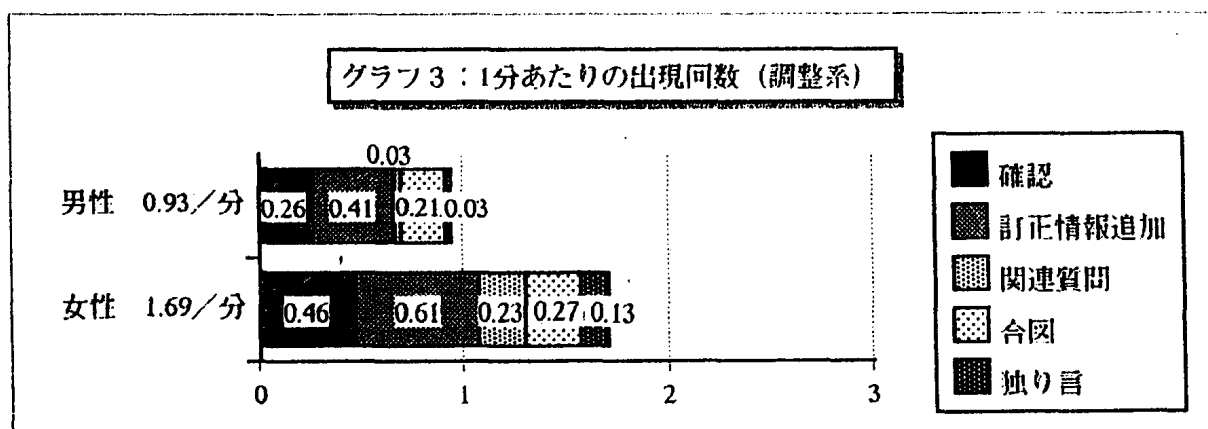
述べている。上の例では後半部分を共同タイプと見ることができが、本調査では、意見が一致した場合には、女性以上に男性が共同してトピックに関わってくる部分が見られた。これは、日本人男性の場合互いの発話をもり立てかつ自分の発話も維持しようとする両方の姿勢があらわれた結果ではないだろうか。

#### 4-2 調整系

調整系では、出現の頻度が女性の方が高い。1分間当たりの出現で見ると女性1.69回に対し、男性0.93回で、女性の方が約1.8倍多い。

調整系の割り込みでは、トピックに関する確認、訂正あるいは情報追加、関連質問、合図、独り言といった発話の割り込みが見られる。これらは、話し手と聞き手の現行トピックに対する情報のギャップや、関心のギャップをいち早く埋め、互いの関わり合いのより強い会話を実現させるための調整的な機能を持つと考えられる。

したがって、女性の会話の方に調整系の割り込みが多いということは、トピックを共有し、参加者の関わりを強化していこうという姿勢が、女性の方に強いことを示しているのではないかと考えられる。



グラフ3の中で、男女の違いが目立つのは、次の例5ようなトピックに関連した質問（関連質問）の割り込みが、女性の会話に多い点である。

例5 2種類のデザートについて (FG7)

N: . . . ココナッツミルクがかかってシナモンが . . . . . で、ほーんとおいしかった [から

T: [それと何、2種類って、もう1種類は？

N: あ、もう1種類は何かねオレンジのゼリーみたいな [かんじ

→T: [それもおいしいの？

N: それもおいしかったよ、だけど . . . . .

こうした割り込みは、女性は1分あたり0.23回（調整系の13.6%）生じているのに対し、男性では0.03回（調整系の2.8%）と顕著な差が見られる。上の例の「それと何2種類って . . . . .」のような発話も関連質問であるが、本稿では、このような相手発話の末尾との重なりは、割り込みとしては、カウントしていない。しかし、参考として末尾の重なりについても比較すると、関連質問は、女性では1分あたり0.23回生じ、発話末尾の調整系の32.3%を占め最も多いのに対し、男性では、0.05回、7.1%に過ぎない。このことからこうした質問が、女性の発話の特徴的なものとしてとらえ得ることがわかる。

女性の会話に質問が多く、しかもそれらが支援的であることは、Fishman (1980) でも報告されているという。女性は質問という手段で、相手の話を引き出し、それによって、相手のトピックを展開させたり、自分がトピックを共有できるような方向づけを行っていることが考えられる。関連質問の割り込みもその反映であると考えられることができる。

その他の「確認」や「訂正、情報追加」などでもグラフ3が示すように、女性の方が男性より高い頻度を示している。これらは聞き手の関心を示すとともに話し手と聞き手の共通理解の基盤をすばやく築こうとする姿勢が、女性の方に顕著であることを示唆するものであると言えよう。

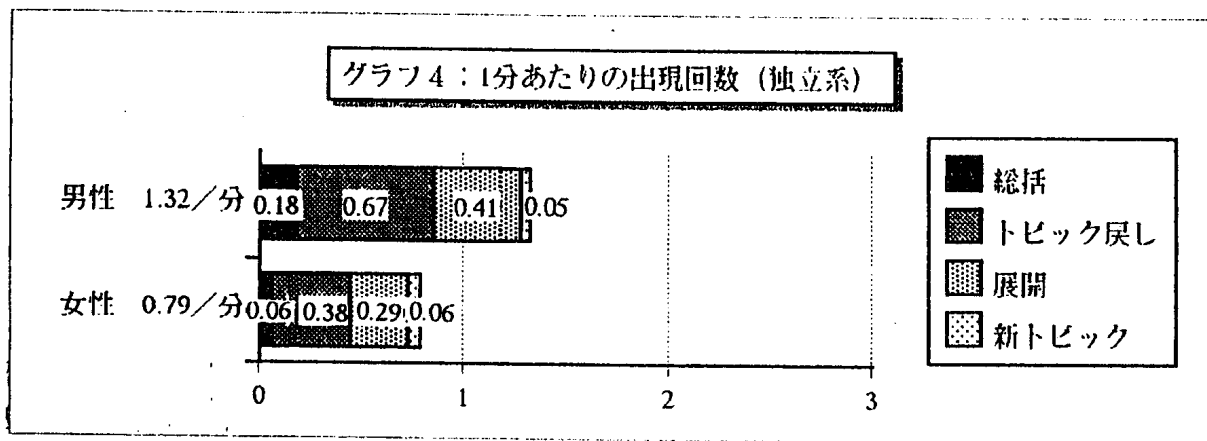
#### 4-3 独立系の割り込み

独立系は、調整系とは逆に、男性の方が多い。男性1分あたり1.32回（独立系の26.7%）に対し、女性は0.79回（独立系の16.1%）である。（グラフ4）

独立系の割り込みは、先行発話に対して、自分の発話の方を優先させている



もので、妨害的な要素を持つと言えよう。また、独立系の多くには、なんらかのトピックの変更が見られ、相手のトピックが十分尊重されていないという意味で、相手への脅かしともなる。こうした割り込みでは、独立性、優位性、独自性、相手との差異などが強調されると考えられる。男性に独立系の割り込みが多いということは、男性の会話の方にこうした志向が強いことを示唆していると言えよう。



独立系の中では、男女とも「トピックの戻し」の比率が高いが、男性0.67回に対し、女性0.38回で、男性は女性の約1.8倍の頻度で、これを行っている。しかも、男性に目立つのは、トピックが横にそれた部分も長い場合でも、それに流されずにトピックを戻すケースが多い点である。次の例6では、Cが自分の発話に割り込んだAの確認の質問に小さい声で応答し、次にそれに続くBの発話にかまわず、初めの自分の発話をそのまま続行させている様子がよくあらわれている。Cの頭の中では、自分の小声の発話も含め、横にそれた部分が、除外されていることがわかる。

例6 ファミコンについて (MG2)

C: ドラゴンクエストがさ [一

A: [ドラクエっていうのは任天堂だよ

C: そうですね小声

B: あれ ファ [ミコンで

→C: [人気あったころ全然やってないからさ、これからゆっくり  
パートワンでも買ってやらなくちゃ

一方、女性の会話に見られる「トピックの戻し」は、ほとんどの場合、次の例のように、すぐに生じている。

例7 夫婦げんかについて (FG6)

M: . . . なんかそれで腹が立つのよ

Y: そりゃそう [だよ

→M: [むこうは愚痴って思うから聞きたくないの . . .

女性の会話では、トピックが一端それたような場合は、むしろそのままトピックが移行していくか、話が尽きた時点で、思い出したようにやっと戻る傾向が見られた。これらのことは、男性が会話の中で、話題を提供し完結させることに重きを置いているのに対し、女性は会話の中で他者との連携の方を重んじていることを示唆していると考えられる。これは、Molts & Boker (1982) の知見とも一致するものである。

男性の「総括」的な発話の割り込みが女性に比べ多いことも、特徴的な点である。「総括」的な発話というのは、発話内容は先行発話のトピックと一致しているが、同意のような形ではなく、例えば、「だから . . .」のような形で自分の意見として言い直したり、まとめを行ったり、あるいはコメントを述べるような発話を指す。調和系のところで取り上げた例2もここに含まれる。次の例ではCの発話が先行発話のトピックを割り込んでまとめている。

例8 テレビゲームについて (MG2)

A: . . . なんか 3つぐらいあるじゃないなんか大きなあのハードが

B: だから、任天堂と セガと 後、P [C

A: うん うん アパ [PCエンジン

→C: [PCエンジンだ [よ

A：が争 [っている

→C： [PCエンジンとメガドライブとファミリーコンピュータだね

B：んーそれが計3種類系統があつて. . . .

このような割り込みは、相手への支援にもなりうるが、同じ立場から支援するというよりは、優位性や独立性を暗に示すことになると言えよう。

「トピックの展開」も男性に多い。女性が調整系の割り込みで、間接的な働きかけによって、相手にトピックを展開させようとする傾向があるのに対し、男性は独立系の割り込みで、自らが直接トピックをコントロールする傾向があることになる。これらは、インターアクションに対する姿勢の違いが反映されたものであると考えることができる。

ところで、独立系の割り込みが実際妨害であるかといえ、必ずしもそうではない。総括が、場合によって相手への支援と受けとめられることもあろうし、新トピックの割り込みにおいても、そのほとんどが、相手発話の内容がなくなり小声になった段階で起こっていた。この場合、割り込みは、会話の活性化を図るものとして機能していたといえる。トピックの戻しも、話者の交替の混乱を防いだり、トピックが横にそれるのを防ぐというプラスの機能も持つ。また、一見、反支援的な割り込みであっても、会話のなかで、参加者がその関係を楽しんでいる可能性も少なくないのである。男性の会話には、例2、例3で取り上げたような、相手のトラブルに同情ではなく、批判的反応を示すようなパターンが少なくない。しかし、こうした反応は発話の内容とは逆にかえって笑いの受け入れや引き金として歓迎されていると見ることができる。つまり、男性の会話では、独自性、優位性、差異などを強調し合うことが、人間関係の潤滑油となっている可能性があると考えられる。このパターンは、収集した女性同士の会話の中には、見られなかった。

## 5 分析結果のまとめ

以上日本人男女のインターアクションの特徴について割り込みの分析から見てきた。ここで、分析結果をまとめると、次のようになる。

\*日本語母語話者の友人同士の会話では、男性も女性も、相手のpositiveな面子を支援する機能をもつ割り込みが、最も多く生じ、基本的には男女ともインターアクションのなかで、相手との協調や協力、連帯感の形成を志向していると考えられる。

\*女性の方が男性より、相手の発話に対する関心を積極的に示し、相手との協調の中で、トピックを共有していこうとする姿勢が強く、そのための方策を用いる傾向が強い。

\*男性の方が女性より、相手とは違った独自性を打ち出そうとする姿勢が強く、相手の発話に対し、競争的で、独立的な方策を用いる傾向が強い。

このような男女差の傾向は、英語圏における言語研究を通じて指摘されていることと一致している。Tannen (1990) は、女性は相手に intimacy (親密さ) あるいはcommunity (一体感) を求め、男性はindependence (独立) やcontest (競争) を求める傾向があり、それが言語場面に現れている (表現にも解釈にも) と述べている。フィリップ・スミス (1985、邦訳1987) は、女性は連携 (affiliation) という目標を求めて相互作用を操作し監視する傾向があり、男性は統御 (control) に関連した相互作用の諸相の操作や監視に関わりを持つ傾向があると述べている。日本語においても、男女差という観点からは、同じような傾向があることが「割り込み」の分析から示唆された。

## 6 終わりに

本稿では、男性同士、女性同士の会話に生じる「割り込み」の現象の分析から、男女のインターアクションのスタイルの違いの分析を試みた。その結果日本語母語話者の会話においても、英語圏における男女差と同じように、女性は「協調、連帯感」をもとに、男性は「競争、独立」をもとにインターアクション

ンを組織する傾向が見られた。割り込みが単純に社会の力関係を反映している現象ではないことは、明らかであるが、こうしたインターアクションのスタイルの相違が、コミュニケーション上の誤解を生んだり、地位の差や力関係の差を生じさせている可能性もある。今後は男女混合の会話に現れる割り込みについても分析を進め、ミスコミュニケーションや対人関係が構成される仕組みをみていきたいと考える。

#### 注

- 1 この現象は必ずしも否定的な意味を持つものではないが、「割り込み(interruption)」という用語で議論されることが多いので、本稿でもこの用語を使う。
- 2 Edelsky(1981) が述べる共同floor タイプのように、複数の参加者が同時に発話権を持つと解釈できる場合もある。

#### 参考文献

1. Brown, Penelope & Levinson, Stephen C. 1987 *Politeness : Some universals in language usage* Cambridge: Cambridge University Press
2. コーツ、ジェニファー1990「女と男とことば」吉田正治訳 研究社 (Coates, Jennifer 1986 *Women, Men and Language* London and New York : Longman)
3. Coates, Jennifer 1996 *Women Talk :Conversation between Women Friends* Blackwell
4. Edelsky, Carole 1981 "Who's got the floor? " *Language in Society* 383-421
5. 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 1993 「性差別のエスノメソドロジーー対面コミュニケーション状況における権力装置」『現代社会学』18 143-176 アカデミア出版会
6. 藤井桂子 1995「発話の重なりについてー分類の試みー」『言語文化と日本語教育』10号 13-23 日本言語文化学会 お茶の水女子大学
7. 藤井桂子 1997「日本語の発話の重なりの特徴ー重なり機能の分析から」『人間文

化研究年報』20号268-277 お茶の水女子大学人間文化研究科

8. Goldberg, Julia A. 1990 "Interrupting the Discourse on Interruptions"  
*Journal of Pragmatics* Vol.14 883-903
9. Holmes, Janet 1995 *Women, Men and Politess* London : Longman
10. James, Deborah and Clarke, Sandra 1993 "Woman, Men and Interruption: A  
Critical Review" Deborah Tannen (ed.) *Gender and Conversational  
Interaction*, Oxford University Press 231-280
11. Malts, Daniel N. & Borker, Ruth A. 1982 "A Cultural Approach to Male-Female  
Miscommunication" Gumperz J. J. (ed.) *Language and Social Interaction*  
Vol. 19 195-216
12. Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A., and Jefferson, Gail 1974 "A Simplest  
Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation"  
*Language* 50 696-735
13. スミス、フィリップ 1987 『言語・性・社会』井上和子他訳 大修館書店  
(Smith, Philip 1985 *Language, the Sexes and Society* Oxford and New York:  
Basil Blackwell)
14. Tannen, Deborah, 1984 *Conversational Style: Analyzing talk among friends*.  
Norwood NJ: Ablex
15. Tannen, Deborah, 1990 *You Just don't Understand. Women and Men in conversation*  
New York : Ballantine Books
16. 山崎敬一・好井裕明 1984 「会話の順番とりシステム—エスノメソドロジーへの招待」  
『言語』7 86-94 大修館
17. Zimmerman, Don H. and West, Candance 1975 "Sex Roles Interruption and  
Silences" Barrie Thorne and Nancy Henley (eds). *Language and Sex :  
Difference and Dominance* 105-129 Rowley, MA: Newbury House

## 文字化における記号

アルファベット：話者

[ ： 発話の重なる開始箇所

@ ： 笑い

= ： 前の発話の終了とほとんど同時に発話が始まったことを示す

→ ： 説明の対象としている発話

— ： 前の音節が長く延ばされたことを示す

、 ： ごく短いポーズ

? ： 上昇イントネーションを示す

・・・： 発話の記述の省略を示す

下線 ： 下線の部分について音声的な説明を加えた

波線 ： 笑いながら発話されたことを示す

×× ： よく聞き取れない音声

## 参考資料

### <女性友人同士会話>

### <男性友人同士会話>

データ名	身分、人数等	データ名	身分、人数等
FG 1	大学生×3	MG 1	大学生×3
FG 2	大学院生×4	MG 2	大学院生×3
FG 3	大学院生×4	MG 3	大学院生×4
FG 4	主婦×3	MG 4	会社員×2、教員×1
FG 5	主婦×3	MG 5	自由業×3
FG 6	主婦×4	MG 6	教員×3
FG 7	主婦×4	MG 7	団体職員×3